

【安藤昌益研究の最前線（その4）】

安藤昌益の医学の継承者である江戸の町医・川村寿庵と

蘭学者・杉田玄白、および その周囲の人々

（江戸の考証学派の漢方医・目黒道琢ほか）

との交友関係などについて

Key words : Ando Shoeki , Kawamura Juan ,
Sugita Genpaku , Meguro Doutaku , Hori Soyo

和田耕作

(Kosaku Wada)

・1 はじめに

安藤昌益の医学の継承者として知られる江戸の町医・川村寿庵（錦城、享保十六年〔一七三一〕？～文化十二年〔一八一五〕）については、『『日本名山図会』と川村寿庵』（岩手県立博物館 第60回企画展図録、平成20年10月）などに詳述されているが、これまで蘭学者・杉田玄白（享保十八年〔一七三三〕～文化十四年〔一八一七〕）と川村寿庵との交友関係については、昌益研究者たちにはまったく知られていなかった。

それはなぜであろうか。これまでの川村寿庵研究の基本文献は、森三の「川村寿庵とその名山図会」（『森銑三著作集』第十一巻所収）

などであった。森銑三は、永年にわたり寿庵の研究を進めていたが、それには、寿庵と杉田玄白との交友関係については、まったく触れられていなかったからである。

このたび刊行された松崎欣一著『杉田玄白 晩年の世界——『鵠齋日録』を読む』（慶應義塾大学出版会、2017年11月30日発行）には、川村寿庵と杉田玄白との密接な交友関係についての記述がみられるので紹介し、さらに『鵠齋日録』の刊行本などを参照しつつ、

玄白の周辺の人物たちと川村寿庵との交友関係、および目黒道琢の著書などにおける川村寿庵の処方、その他のことについても考察を進めてみたいと思う。

『鵲斎日録』の刊行本には、『杉田玄白全集 第一巻』（『鵲斎日録』、生活社、昭和19年11月）がある。この本の復刻版が『杉田玄白日記一鵲斎日録一』（蘭学資料叢書6、青史社、1981年10月）として刊行されている。

本稿では、『杉田玄白全集 第一巻』（和田文庫蔵本）により『鵲斎日録』を引用する。

なお、松崎欣一氏は、稿本の『鵲斎日録』などを底本としている。

・ 2 杉田玄白・柴野栗山・川村寿庵の交友について

実は、片桐一男著『杉田玄白』（人物叢書、昭和54年4月、4版、吉川弘文館）のなかには、すでに『杉田玄白全集 第一巻』（『鵲斎日録』）により、川村寿庵の名も示されている。

「 四 病論会

〈天明七年正月、産論会始まる〉

さて、あらためて玄白の（『鵲斎日録』を最初からみると、玄白が毎月一度「病論会」なる会合に出席していることがわかる。特に天明七年正月二十日の条には「産論会初」とあるから、この種の会合の初会であったものかもしれない。会の名称も当初は「産論会」「医者会」「医会」などといって、特に定まっていなかったが、やがて寛政元年から「病論会」に定着した様子である。

〈病論会の定日は毎月八日、のち十一日に変更〉

〈会場は会員の廻り持ち〉

医学上の集会であったようで、期日も初期の頃は毎月八日が原則であったようにみうけられるが、のち寛政九年の頃からは十一日に変更したようである。会場は会員の廻り持ちであったことが窺える。当然のことながら、わが玄白も何回か会場を自宅に引き受けて責任を果たしている。

〈病論会のメンバー〉

会員の名は全部を明確にしえないが、（石川）玄常・斯波栄碩・石口安哲・目黒道琢・川村寿庵・新富某・神戸周悦・加川某・新山某・利光・新城某・藤坂道恕・南前某・原長川某・山本済川・など十数名を数えている。いずれも医師であるが、必ずしも蘭方医ではない。専門流波を越えて、知識の交換が行なわれた模様である。特にこのうちでも川村寿庵や藤坂道恕・新城の各氏とは別に俳諧の会を度々開催している間柄であって、殊のほかうちとけた会員であったようだ。」（片桐一男『杉田玄白』、285、286頁）

片桐一男氏は、このように杉田玄白と川村寿庵との親しい関係について簡潔に述べている。漢方医である川村寿庵が、蘭学の大御所である杉田玄白と一緒に医学を論ずる会を毎月定期的に開いていたとは驚きである。両者の度量の大きさをみる思いである。

実は、これらのことは玄白からすれば、別に驚くものではないのである。玄白は、養嗣子の伯元を、京都の古方家から蘭学者となった

小石元俊（一七四三～一八〇八）のもとに遊学させている。さらに伯元を、当時京都の東堀川に住んでいた儒者・柴野栗山（一七三六～一八〇七）のもとに入門させ、漢学の素養を身に付けさせている。その柴野栗山は間もなく松平定信に招かれて江戸にのぼり、昌平黉の教授となる。すでに片桐一男氏が指摘しているように、杉田玄白と柴野栗山との交友は、相当に親しい関係であることがわかる。それは『鵲斎日録』のなかに頻出している「栗山先生」などの記載からも明らかである。そして、川村寿庵と柴野栗山もまたお互いをよく知る間柄であったことは言うまでもない。この柴野栗山が後に、川村寿庵が編集した『名山図譜』（一八〇五）、『日本名山図会』（一八一二）に序文を寄せることになるのはもはや必然的なのであった。

そして、栗山の序文は、川村寿庵その人の本領をとらえた余すところのない名文となっている。なお、その序文の内容については『『日本名山図会』と川村寿庵』、岩手県立博物館、第60回企画展図録などを参照されたい。

・ 3 松崎欣一著『杉田玄白 晩年の世界——『鵲斎日録』を読む』

のなかの川村寿庵

松崎欣一氏は、『鵲斎日録』の稿本類を直接に解説しつつ、川村寿庵について述べている。

「『日録』には川村寿庵の名は寛政元年正月十八日〔これは八日が正しい〕の条に「夜川村寿庵亭病論会」とあるのを初出として四十七件ほど記録されている。病論会の他とくに「俳会」への出席に関わるものが多い。

寛政九年の場合、全九件の内、俳会六件（一月十七日、四月二十八日、六月二十三日、閏七月六日、十月五日、十一月二十日）、病論会一件（四月八日）、その他「川村宴」とあるもの二件（五月十九日、同二十九日）である。

寛政十年十二月二日の条には「夜川村宴。秋月侯藩医館元正〇死。前夜杯中之火と成ト云〇〇物語也」、また同月十一日の条には「川村病論会。肥前唐人瀬と云所にて先頃、和蘭船破損事と云」とある。秋月藩医館元正の死、あるいは和蘭船の難船などが話題になったようである。こうした会合の折に様々な情報が交換されたのであろうことが窺える。

享和二年三月には玄白の薩摩風邪罹患のことがあり、その治療処方記録の中に、「石川」の名とならんで「川村伝」などとして四回ほど名前が記録されている。また「川村宅篠崎宴」（寛政九年五月二十九日）、「道恕宴、川村送別」（享和元年七月十九日）などとも記されており、篠崎朴庵、藤坂道恕らとの相互関係もみることができる。

『甲子夜話』には川村寿庵について「風雅人にて、其人名山を好んで諸国を登渉せり。一年高野山に登りしとき」、「殊に英岳を好み幾度か登れり」などとあり、「川村送別」というのは川村のそのような旅立ちの機会に催された宴であったかも知れない。」

（松崎欣一『杉田玄白 晩年の世界—『鵲斎日録』を読む』、122、123頁）

松崎欣一氏は、『鵲斎日録』を丁寧に解説して、川村寿庵の記事が

「四十七件ほど記録されている。病論会の他とくに『俳会』への出席に関わるものが多い」という。

松崎氏の言うように、「川村寿庵亭病論会」の初出は、「寛政元年正月」であるが、「寿庵」の名は、すでに『鵲斎日録』に第一冊目の天明七年正月十六日に条に「今晚目黒道琢方会席上談、寿庵曰・・・」（4頁）として出ている。

その正月の二十日に「夜産論会初」とあるので、この会の始まりと同時に『鵲斎日録』が書かれたものと思われる。その三月二十三日には「夜医会」とあり、しだいに「病論会」と呼ぶようになっていったもようである。

これまでの川村寿庵の交友関係などについては、『『日本名山図会』と川村寿庵』（岩手県立博物館 第60回企画展図録）に、「川村寿庵関係図」（105頁）としてまとめられているが、このたび杉田玄白の周囲の人々との交友関係が明らかとなり、「川村寿庵関係図」は大幅な増補が必要となった。

・4 「病論会」の主なメンバーたちについて

杉田玄白と川村寿庵以外の「病論会」の主なメンバーたちについても、わかる範囲でみておこう。片桐一男氏と松崎欣一氏の挙げている主なメンバーは、以下のとおりである。〔 〕内は、和田による。

《片桐一男》

《松崎欣一》

・（石川）玄常

———

・斯波栄碩

・斯波栄碩

・石口安哲	————
・目黒道琢	・目黒道琢
・川村寿庵	・川村寿庵
・新富某	————
・神戸周悦	・神戸周悦
・加川某	・加川〔子慶〕
・新山某	・新山
・利光	・利光
・新城某	・新城
・藤坂道恕	・藤坂道恕
・南前某	・南前
・原長川某	・原長川
・山本済川	・山本済川
————	・家城
————	・新家〔玄常〕
————	・所

両氏の挙げているメンバーの異動で、特に注目すべきは、「（石川）玄常」と

「新家」である。〔以下、『杉田玄白全集 第一巻』（『鵲斎日録』）の頁〕

- ・「新家玄常宅集坐談」（8頁）
- ・「石川振舞」（10頁）
- ・「夜玄常宿」（25頁）
- ・「新家玄常宅集」（41頁）
- ・「西川玄常宿」（42頁）
- ・「新家□□会」（70頁）

実は、このように「新家玄常」「玄常」「石川」などが、混在しており、これをどのように解釈するかで、氏名の挙げかたに異動が生じているのである。私としては、「石川玄常」はメンバーではないかもしれないが、次節でみるように、川村寿庵とともに「玄白への治療」行為をしているとみられるところから、ここに含めて論じておきたい。

片桐一男氏の新著『杉田玄白評論集』（勉誠出版、2017年5月刊）には、「病論会」の主なメンバーとして「玄常、斯波榮碩、石口安哲、目黒道琢、川村寿庵、新富、神戸周悦、加川、利光、新城、藤坂道恕、南前、長谷川、山本済川、新家など」（220頁）とあり、玄常の前にあった「（石川）」が削除されている。「長谷川」は、「原長川」

の誤植と思われる。

・杉田玄白・・・蘭学者、『解体新書』訳者

われわれはこれまで、玄白の医学思想のなかの、漢方の位置づけについて、

十分に認識してこなかったのではないか。玄白は次のように述べている。

「上代の周のころは、まだ医学の道もきちんとしていて、疾医（内科）と瘍医（外科）

とがちゃんと分れていた・・・宋・元の時代になって・・・『千金方』とか『外台秘要』

とかの古医書にとりついて外科を立てたものですから、外からの治療の術はかえって

下手になったように思われます。

しかしそうはいっても、内療に関してはシナほど進んでいるところはあるまい、

さいわい日本にはオランダの膏薬や油薬また手術法も少々は伝わっているから、それを主にし、

さらに各家に伝わった秘方で自分が覚えた分はみな公開していっしょにし、そのうえに内療の

ほうはシナの医書によるにしても、日本伝来の妙薬なども加え、それら全部をひとつにまとめて

漢文にし、日本一流の外科をうちたててやろうと、若いころから心がけてまいりました。

・・・根太（ねぶと）・腫物（はれもの）・吹出物といった古い言葉の意味を生かして部門分け

をし、およばずながらシナ人にまでもわが日本流の外科をさせてやろうというつもりで著述

を企てまして、草稿が七、八巻ほどできあがりました。」

（「和蘭医事問答」のなかの玄白から建部清庵への答書、芳賀徹訳、『日本の名著22、

杉田玄白・平賀源内・司馬江漢』より引用）

ここには、蘭学と漢方の両方から、新しい外科学を打ち立てようと

する杉田玄白の思想がにじみでている。蘭学者・玄白が、川村寿庵や

目黒道琢らの漢方医たちと「病論会」を行うことは、何ら不思議なこと

ではないのである。これまでの科学史研究では、蘭学者と漢方医と

を対立的にとらえてきた傾向があると思われるが、これについては

とらえ直しが必要ではないだろうか。

・川村寿庵（錦城）・・・漢方医（町医）

青森県三戸生まれ。名は元善、字は子長、号は錦城。安永二年

江戸にのぼり安藤昌益（二代目）のもとで稽古、後に昌益の師・川村快庵

に入門する。快庵没後娘婿となり、川村家を継ぐ。

寿庵には『医真天機』（京都大学富士川文庫蔵）、『錦城先生経験方』（内藤記念

くすり博物館蔵、舟山寛写、文化五年写）などがあり、『錦城先生経験方』には安藤昌益

の処方として知られる「安肝湯」が記載されている。寿庵の次男の博（真斎、一七八四～

一八五二）もまた、安藤昌益の稿本『自然真営道』の医学部門の内容を記述した『真斎謾筆』

など多数の昌益医学関連資料を残している。〔『『日本名山図会』と川村寿庵』

（岩手県立博物館 第60回企画展図録）、「2009安藤昌益研究発表会記録集」（調べる会、2009）に詳しい。〕

《「川村別荘」のこと》

このたび『鵜斎日録』を詳細に見ていたら、享和二年三月の玄白の「薩摩風邪」罹患後の五月十一日に「川村別荘病論会」（501頁）とある。その年の十二月十二日には「川村別荘へ参」（515頁）、享和三年正月十三日には「昼 川村別荘宴」（524頁）、享和三年十月十八日には「川村別荘宴」（553頁）、とある。

この「川村別荘」の場所は不明であるが、寿庵は隠居後（文化初年ころ）に「北本所番場町」に住んだということなので、「川村別荘」の場所は「北本所番場町」であろう。

・石川玄常・・・蘭学者

『解体新書』に杉田玄白・中川淳庵とならんで、「東都 石川玄常世通 参」とある。

石川玄常の「事績については、太田錦城が撰した墓誌銘によってみる以外に

その資料を持たない。それによれば、石川玄常は延享元年（一七四四）二月二十八日

生まれ、・・・京師に遊学して高名の医と交わって学んだとある。・・・天明八年

に一橋公（徳川治済）の召しに応じて侍医となり、文化十二年（一八一五）正月

二十八日、享年七十二をもって卒したとみえる。」

（片桐一男『杉田玄白』、174頁）

片桐一男氏が、「（石川）玄常」（前出の引用部分参照）と石川をカッコに入れているのには、理由がある。『鵜斎日録』の「天明七年七月八日」のところに「夜玄常宿」とあるからである。毎月八の日は「病論会」のある日であるから、ここには「病論会」と記されていないが、片桐氏は、石川玄常を「病論会」のメンバーと推測したようである。しかし、松崎欣一氏は「病論会」のメンバーとして、石川玄常の名を挙げていない（前述、参照）。「病論会」の会場は、メンバーの持ち回りであるが、石川玄常宅で開かれたというような記録がないからである。私も、石川玄常は「病論会」の正式なメンバーではないと思っているが、次節でみるように、享和二年三月、杉田玄白が「薩摩風邪」に罹患し、病勢がさらに悪化した時、『鵜斎日録』に「十五日 石川 回陽返本湯 同 川村 丸□□」とあるように、同じ十五日に石川〔玄常？〕と川村寿庵のふたりがいち早く駆けつけて、玄白への治療を行っていると思われることから、石川〔玄常？〕と川村寿庵は、知己の間柄であると考え。石川〔玄常？〕は「病論会」の正式なメンバーではないかも

しれないが、玄白のグループの重要な人物として、ここに含めることにした。

・目黒道琢・・・江戸考証学派の漢方医

目黒道琢（元文四年〔一七三九〕～寛政十年〔一七九八〕）の事

蹟については、『近世漢方医学書集成107 目黒道琢』（名著出版、昭和58年）の「解説」（小曾戸洋）に詳しい。これによると、目黒道琢

（号、飯溪）は、会津の人、二十歳で江戸に出て医術を究め、多紀藍溪の推挙により、医学館の教授となり医経を講じたという。寛政三年まで、白河侯（松平定信）に仕えた。著述は、『素問』『靈樞』『難経』『傷寒論』などの注解書など多数に及んでいる。

『近世漢方医学書集成107 目黒道琢』（名著出版）には、『餐英館療治雑話』『驪家医言』などが収録されている。

矢数道明は、『臨床応用 漢方処方解説』（創元社）の「凡例」において、「先人の口訣書では、『勿誤方函口訣』（浅田宗伯）と『餐英館療治雑話』（目黒道琢）『医方口訣集』（長沢道寿）の三書が最も理解しやすく、記述も妥当のように思われる」として、『餐英館療治雑話』から多数の引用をしつつ、漢方処方の解説をしている。

後述するように、このたび目黒道琢の著書から川村寿庵や堀宗與らの処方を見つけることができたことは、大きな収穫であっ

・《その他の医師たち》

・斯波榮碩・・・漢方医

・神戸周悦・・・漢方医

この二人も、享和二年三月、杉田玄白が「薩摩風邪」に罹患し、病勢がさらに悪化した時に、玄白への治療をおこなっていることが、『鵲斎日録』にみられる。「十九日・・・斯波伝」「二十日・・・神戸・・・斯波」「二十三日・・・永〔榮〕碩」とある。

・藤坂道恕・・・漢方医

松崎欣一氏は、「藤坂道恕宅諸会合」（123頁）の表を作成している。これによると藤坂は、「病論会」「俳会」「軍会」「源氏会」「道具会」など、一番多くの会に参加していることがわかる。

その宅には、薬草園もあったようである。玄白とは相当に密なる交際があった人である。

・山本濟川・・・漢方医

このたび、山本濟川には下記の著書があることが判明した。

『古方要訣』（一冊）、天明二年刊本（刈谷市立中央図書館
村上文庫蔵、全面複写で九十九枚）

山田正珍（図南、一七四九～一七七九）による序文がある。

山田は、儒学を山本北山に学び、大田錦城とは同門である。

亀田鵬斎らとも交友があった。『傷寒論集成』、『傷寒考』な
どの著書がある。

『古方要訣』の巻頭に、次のようにある。

「 下毛 濟川山本源繕著
男 山本公興校 」

『古方要訣』の構成は、以下のとおりである。

「古方要訣巻一」・・・（総論）

「古方要訣巻二」・・・（各論、病症論）

「古方要訣類方」・・・（古方処方をイロハ順に分類）

奥付けには、「 丹方彙編 近刻 」

「 東武書肆 野田七兵衛 」 とある。

内容的には、山田正珍学派の傷寒論集といえるだろう。

・加川〔子慶〕・・・漢方医

このたび、「加川子慶」の処方が、目黒道琢の著書『驪家医言』（東大鶚軒本）

および『驪家医言抄書』（杏雨書屋所蔵）〔ともに『漢方医学書集成107

目黒道琢』に収録、同一の処方〕にあることがわかった。

《加川子慶の処方》・・・「截瘡方 加川子慶 」 〔詳細略〕

・5 川村寿庵（錦城）の杉田玄白への治療処方の実際

享和二年三月、七十歳の杉田玄白は、十二日の「病論会」に出席し
て、蕎麦を食べる。その後、高熱を發し、吃逆（ひゃっくり）や嘔気
（はきけ）なども加わり、「薩摩風邪」に罹患し、病勢がさらに悪化
した。二十日、二十一日には、ついに「人事不省」におちいってしま
うほどの大病となる。

このとき、玄白の治療にあたったのが、「病論会」の面々であった。
その治療処方記録の中には、「石川」らの名とならんで「川村伝」な
どとして四回ほど川村寿庵の名が記録されている。その日記の「欄

外記事」の部分を、『杉田玄白全集 第一巻』（『鵜斎日録』）から引いておこう。（□は文字不明部分、〔 〕内は和田による。）

「十三日朝 麻黄湯 同昼 九味羌活湯 同晩 竹〔葉〕石膏湯

十四日朝 柴胡加龍骨牡蠣湯 十四日昼 川村傳 青□・山椒・

甘草 右 水煎 同 麦門冬湯

十五日 石川 回陽返本湯 同 川村 丸□□

十六日 川村 施覆花代□□湯 □錫丹

十七日 同 川村傳 附子末鹽 右□□炒り袋に盛り胸上を

蒸す

十八日 前方 』

（『杉田玄白全集 第一巻』〔『鵜斎日録』〕、497頁より引用）

川村寿庵（錦城）の処方集としては、『錦城先生経験方』（内藤記念くすり博物館蔵、舟山寛写、文化五年写）などがあり、これには安藤昌益の処方として知られる「安肝湯」が記載されている。

上記の『鵜斎日録』の処方と『錦城先生経験方』にある処方とを比較してみよう。（以下の『錦城先生経験方』の丁数は見開きの左頁下の数字によるもの）

【『鵜斎日録』】・・・【『錦城先生経験方』にある処方の丁数】

- ・麻黄湯・・・（第二丁にあり、『傷寒論』の処方）
- ・九味羌活湯・・・（第三十二丁にあり、羌活湯、『万病回春』の処方）
- ・竹〔葉〕石膏湯・・・（第十丁に「石膏散」とあるが、「右細末白湯送下」

とあるので、「竹〔葉〕石膏湯」〔『万病回春』の処方〕と同じ処方であろう。）

- ・柴胡加龍骨牡蠣湯・・・（第二十四丁にあり、『傷寒論』の処方）
- ・麦門冬湯・・・（第十丁にあり、『金匱要略』の処方）
- ・附子末鹽・・・「塩附子」のことであろう。

以上から、これらの『鵜斎日録』の処方は、川村寿庵（錦城）が日ごろの診療・治療に用いていたものであることがわかる。

なお、「石川〔玄常?〕」による「回陽返本湯」とは、「回陽救急湯」（『万病回春』の処方）のようなものではないかと思われる。「回陽」とは、精気をとりとどすことである。

- ・ 6 目黒道琢の著書『驢家医言抄書』（杏雨書屋所蔵本）に収載され

ている川村寿庵（錦城）の処方

このたび、川村寿庵（錦城）の処方が、目黒道琢の著書『騷家医言抄書』（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵本）〔『漢方医学書集成107 目黒道琢』に収録〕にあることがわった。

《川村寿庵（錦城）の処方》・・・・・・・・

「治婦人淋疾 河村壽庵

芩々香 中 海螵蛸 小 柚皮 大 甘草 小 水煎 」

目黒道琢の著書『騷家医言抄書』に川村寿庵（錦城）の処方を発見することができたことには、大きな意義がある。これは寿庵の

臨床家としての実力を証明しているからである。

・7 安藤昌益の高弟・神山仙確の義兄・仙悦が弟子入りした

江戸の医師「堀 宗興」とその処方について

——目黒道琢の著書『騷家医言』『騷家医言抄書』にみられる

「堀 宗興」の処方

安藤昌益の高弟・神山仙確の義兄・仙悦が弟子入りした江戸の医師

「堀 宗興」の事蹟については、これまでまったく不明であった。

このたび、目黒道琢の著書『騷家医言』『騷家医言抄書』の中に、

「堀 宗興」の処方を見つけることができたので引用しておきたい。

《堀 宗興の処方》・・・・・・・・

〔『騷家医言』と『騷家医言抄書』の両著にみられる処方〕

「○ 安鎮丸 治癰瘤 堀 宗興傳

紫河車 一両 菟藟根 二分（陰干） 角石 甘草 各七分

右四味黒霜加麝香 二分 再合分七服日一貼煎服

服後欲知愈者可喰菟藟不除勿発 」

「○ 治酒疸及一切酒客病 堀 宗興

黃連 黃芩 各三分 大黃 二分 半夏 三分

甘草 小 枳棋子 五分

右六味水煎服 為散白湯下 尤佳 」

「○ 治疳湯 治疳癖 堀 宗興

野蚕殻 一● 大黃 二● 青黛 五● 紅花 五分

甘草 右以三合煮減半 分温服」

〔●は「浅」から「さんずい」を除いた字〕

「堀 宗興」については、今回、この三処方が見つかっただけで、その他の事蹟については、「外科」医とあるのみでまったく不明である。

神山仙確の義兄・仙悦（宗仙）は、享保十二年に江戸にのぼり、外科医「堀 宗興」に入門する。しかし、享保十五年には、「堀 宗興」のもとから「出奔」している。

仙悦は、その後「古川宗銭」と名乗り、深川あたりに住んでいたという。元文二年に「出奔」の罪を許され、明和三年には八戸藩への出入りも許されている。また、「古川宗眠」などとも名乗っている。（野田健次郎「神山家について」、および「八戸藩日記」を参照した。『安藤昌益全集』〔校倉書房刊〕第十卷所収による。）

また、「八戸藩日記」には、元文五年（一七四〇）九月八日の条に「堀宗与悪事付審、逆意の族」などとあるという（松尾政重「安藤昌益と神山家のひとびと」、「調べる会通信」第3号、2004年11月）。

この江戸の医師「堀 宗興」の事蹟については、さらなる探索が必要である。御縁のある方々からのご教示をお願い致したい。

・ 8 むすび

このたび、松崎欣一著『杉田玄白 晩年の世界——『鵜斎日録』を読む』（慶應義塾大学出版会、2017年11月30日発行）を入手したのをきっかけに、川村寿庵と杉田玄白との密接な交友関係、および目黒道琢の著書などから、寿庵や安藤昌益の高弟・神山仙確の義兄・仙悦が弟子入りした江戸の医師「堀 宗興」の処方などを見つけることができたことは、誠に幸いであった。

玄白の『鵜斎日録』は、すでに昭和19年に刊行されていたが、これに「川村寿庵」の名が出ていることに気づくことがなかったのは、その本と片桐氏の本もともに所蔵していた自分自身にも反省すべき点があったのかも知れない。これらに目を向けさせていただいた松崎欣一先生にこころからの感謝を申し上げたいと思う。

〔脱稿：2017年12月18日、和田耕作〕

〔2018年1月1日、PHN（思想・人間・自然）、第29号、PHNの会発行〕

〔2018年1月1日、和田耕作（C）、無断転載厳禁〕
